

“超二流”のプロ魂が 支えた野球人生

日本テレビ野球解説者／前オリックス監督

土井 正三

聞き手：佐多保彦（株）東機貿代表取締役社長

どい・しょうぞう

1942年、兵庫県生まれ、立教大学卒業。V9時代の巨人軍で二塁手として活躍。巨人軍コーチ、オリックス・ブルーウェーブ監督などを経て、現在日本テレビ野球解説者。



佐多：今年の巨人は好スタートを切りましたが、土井さんはこれをどう感じになりましたか。

土井：まさに「落合効果」でしょうね。落合選手は柱になれる選手ですから。チームには皆を引っ張っていくようなダウンとした柱が必要なんです、それは監督じゃだめなんですね。これまで、原、篠塚、吉村といった選手が何本かの支柱になってきたが、本当の大きな柱にはなりえなかった。落合選手はいま、ただ「打つ」というだけじゃなくて、大黒柱としてチーム全体に安心感を与えています。彼がいて松井選手が大活躍したから、周りに波及して相乗効果を出したんですね。

佐多：落合選手一人がチーム全体を変えた、と。

土井：そうです。たった一人が入って来たためにチーム全体がパッと生命力を吹き返すっていうこと、本当にあるんですよ。例えば、僕が巨人に入団したON（王・長嶋）時代の昭和40年、金田正一さんが国鉄から入って来た。この大投手は、キャンプにナベ、カマ、枕までもってくるんです。場所が変わったからといって体調をくずすことのないようにと、万全を期してのことです。そして食生活の管理、個人的なトレーナーまで随伴してくるという徹底ぶり。この筋金入りのプロ根性が、チーム全体を変えるほどのショックを与えたんですね。「ここまでやるのか」と。その影響力はすごかった。下の選手にガタガタ指導するのではなく、上の選手がちょっとやってみせるだけで、ピラミッドスタイルができてしまう。この効果を川上監督は狙ったんです。もちろん彼ほどの選手だったからできたんであって、雑魚ではこうはいきません（笑）。

長嶋さんも、前回巨人が最下位になったとき張本選手を迎えたでしょう。張本選手の活躍で王選手が再生し、チーム全体が刺激を受けて、51、52年に優勝した。このような、かつての「金田効果」「張本効果」を見ていた長嶋監督は、今回、落合選手を入れてチームの活性化をはかろうとしているんですね。彼が打つにこしたことはないけれど、むしろ活性剤として期待していると思いますよ。

佐多：なるほど。

ところで、落合選手のような超一流選手の素質とは、どのようなものなんでしょう。

土井：そうです

ね。集中力があって、チーム全体に気を配りながら、チームをリードする気迫、やる気。それに創意工夫。こうでないと超一流とは言えないですね。あとは「間」のとり方ですね。例えば、ピッチャーがピンチの時、落合選手は絶妙なタイミングで出て行きますよ。試合全体の中での「間」を肌で知っているんですよ。長嶋さんも「間」ははずさなかった。それはもう天性のものがありましたね。

かつて川上監督は名指しで長嶋選手を叱ることがありましたが、それでチーム全体がピリッとひきしまりました。長嶋さんも、何のわだかまりもなく怒られ役を引き受けていました。それは彼の性格を知り抜いた上での、川上監督一流の選手掌握術でもあったんです。

佐多：V9時代の選手は、チームに王、長嶋という二人の英雄を持つという難しい状況のなかで脇をしっかり固めておられましたね。その成功と強さの秘訣は何だったのでしょうか。

土井：まず二人の人間性のよさですね。また、僕達は二人に技術対抗できないと分かっていたから、「自分の仕事に徹する」というかたちで個々の力を発揮したということがあるでしょうね。例えば柴田選手は塁に出て走る。僕は2番に出てつなぐ……各自の役割分担のなかで、プロとして自分の仕事をカッチリすることこそが彼らに対抗する術だった。決して二人に依存することはなかったし、またそれがプロとしてのプライドだったのです。チームが強くなるためには、超一流の選手に呼応した、それくらい確固たるプロ意識がメンバーに必要な不可欠だったのです。

佐多：かつて三原監督は、土井さんのようなこれぞプロフ



VITALITE

インタビュー



’73年、土井二塁手



巨人軍内野陣(写真提供:報知PRセンター)

エッショナルと呼べるような「いぶし銀」の選手達を「超二流」という言葉で表現されていましたが、特定の分野におけるプロ意識をもつということですね。

土井：そう、自分の分担にどれだけ徹底し切れるかです。今年、落合と松井がいいなら、一年間どれだけ徹底して彼らにチャンスを作ってやれるかということ。周りの選手が縁の下で力持ちになることに納得するようになれば、巨人も変わってくると思います。あとは選手個人のやる気と、そのやる気が正しく評価されることが必要ですね。例えば僕は、内野の要である二塁を守り、またONの力を最大限引き出す脇役に徹し、チームプレーに力を注いでいたけれど、その姿勢が評価されなければやらないですよ。僕らの時代はチームプレーを認めてもらって、どんどん給料も上がった。タイトルをとらなくとも、それなりの評価をしてくれていることが分かっていた。四年目には一千万プレーヤーになりましたから。

ところがその後、チームプレーより個人の成績で評価し始めた。「個人のアベレージだけを問題にするんなら、チームの勝敗は関係ないんだな」と、選手のやる気がガタガタッと落ちてきたのが、48、49年。ここで川上監督時代から営々と築いてきた現場と会社のいい関係が崩れてきた。経営者はやはり正しい評価をすべきですよ。選手のやる気をどう起こさせるかは、現場の監督、フロントや会社の経営者の評価と手腕にも大いに関係があるわけです。

佐多：選手のやる気、ある種の生命力のようなものは、昔と今とは違いますか。

土井：それは違います。僕らはコーチに何か言われるのを待ってはいなかった。いいプレーは好きあらば盗んでやろうと思っていたし、独自の方法を編み出そうとしていたものです。今の人は次になにをやればいいのか、いちいち聞きにくる。

「各自、やりたいことがあるだろう、かつてにやらんかい」と言いたい。それに若いのに諦めがはやい。僕なんかは絶対に諦めないという、突き上げるものがあった。だからこそプロとしてやってこれたと思っています。強いやつが後から追いつけてくれば、必ず負かしてやるという気持ちが働いた。セカンドの後継としてジョンソン、シピン選手が入って来たときも、松本選手が入って来たときも、冗談じゃない、負けてたまるかと思いました。本能的にね。

ただ、篠塚選手のときは、キャッチボールを見たときから、「やられる」と思った。だから指導しなかった。それは僕がプロとして生き抜くためには必要なことだった。その後、コーチになったときには徹底的に個人教授しましたよ。ま、僕の場合は、やる気も負けん気も性格的なものかな(笑)。

佐多：最後に、今、Jリーグが人気ですね。プロ野球がちよっと押されざみではないでしょうか。

土井：危機感を抱いていることは確かです。サッカーは野球の持つマイナス面を考慮して運営しています。フランチャイズ制を徹底し、地域と密着したファンを増やし、ジュニアの育成にも成功しています。そんななかで野球がもう一度観客動員力を発揮するためには、ファンに向けて新たな魅力づくりを考えていかないとはいけません。技術を高め、ゲームをエキサイティングなものにするのはもちろんのこと、プロ野球をビジネスと考えて真剣に取り組むことが大事でしょうね。女性ファンの開拓のために、レストルームをホテルなみにするとか。女性の優待日を設けるとか……。

それに、日本野球のナショナルレベルを向上させるためには、野球界のプロとアマの垣根にこだわらず交流を進め、底辺の拡大をはかること、そのための質の向上を担う優れた指導者を育てていくことが必要じゃないでしょうか。

TOPIC

脳神経外科に 女医会あり

加藤 庸子

かとう・ようこ

78年、愛知医科大学卒業。80年、藤田保健衛生大学に移籍。オーストリア・グラーツ大学留学を経て、85年、脳外科専門医取得。86年、クモ膜下出血の脳内攣縮研究により学位取得後、89年より藤田保健衛生大学講師。



突然の激しい頭痛に始まり、吐き気、嘔吐、意識障害などをともなうクモ膜下出血は、脳動脈瘤の破裂によるクモ膜下腔への出血が原因だが、その死亡者数は年間約1500人、元気に働きざかりを襲う。これを含む脳梗塞や脳出血などの脳血管障害は、戦後30年ほどずっと日本人の死因の第1位であった。80年代からは、ガンや心疾患に続く第3位、全死亡者数の20%を占めている。

その他、脳腫瘍や頭部外傷、脊髄疾患、水頭症、パーキンソン病、三叉神経痛等々、神経系疾患を外科的に治療する脳神経外科医師は、その数約6200人。うち女性の専門医は、全国で44名しかない。男女雇用機会均等法が施行されて8年、女性医師も現在12%と増加し、医学部に占める女子学生の割合は4割近くになった。しかしそれでも、外科系を目指す女子医学生は1.7%と極端に少ないようだ。

このような状況の中で、脳外科女医の先駆として自らのキャリアを追及する一方、日本脳神経外科女医会を組織して4年、この5月29日、吉岡弥生賞^{*}を受賞された藤田保健衛生大学病院の加藤庸子講師にインタビューの機会を得た。

学生時代から、脳神経外科医を目指していたんですか。

加藤：いいえ。もともと外科系は好きで、脳卒中関係に興味はありましたが、当時は脳神経外科が女性に向いて

いるとは思っていませんでしたし、母には「眼科か耳鼻科に」と言われていました。他の病院に研修医として出ようとしていた、その直前になって突然、教授に「君、体力がありそうだから良かったら（脳神経外科に）入局しないか」という話があって、それに乗ってしまったというのが本当のところ。その後、「しまった!」と思ったことも幾度かありました。でも研修に出てあちこちの病院をまわったり、学位を取ったり、留学したりしているうちに10年はあっというまに経ってしまいました。

留学時代はいかがでしたか。

加藤：ウィーンから西へ2時間程のグラーツ大学に留学し、ネコを使った脳血管障害の細かい実験に没頭していました。実際に開頭して顕微鏡でのぞきながら、頭蓋内圧を高めたときに脳の血管系がどう反応するか、どのへんで破綻するかというようなことを、モニターしてフィルムに収め、あとで分析するのです。実験内容だけでなく、その準備とか見方とか、いろいろと勉強になりました。

大学病院救急救命センターのクモ膜下出血など脳卒中も担当していらっしゃいますが、当直中の緊急手術ということもあるでしょうね。

加藤：以前は、夜中の2時でも3時でもすぐ手術ということが多かったのです。しかし患者さんを診てその状態が悪くなければ朝まで待って、医者も看護婦もコンディションの良い時に手術をするというのがこの頃の傾向になってきています。

脳は生命中枢が密集しているところですから、ひとつ間違ふとその後大変な事が起こりかねない。しかも突然の大

出血など予期せぬことが、ただちに死、または植物人間などにつながる可能性が高いのです。

「あ、もうだめ」というようなことは？

加藤：最近は少なくなりました。頭から血が噴いているような時でも、習ったことや経験の中から、ステップバイステップにやって行くとそのうちになんとかなるという感じです。カーッと焦って「どうしよう」って感じる時が正念場でしょうけど、やはりいかに経験を積んでいるかということが大事です。このごろはかなり心臓が強くなりました(笑)。

私が非常にラッキーだったと思うのは、脳外科が面白いなと思い始めたころから、かなり患者数が多くなり手術を見る機会も沢山あったこと。そのうえ教授、助教授が患者さんに対して親切できめ細かい。どんどん増える患者さんに比して人手も足りなかったのも、教授、助教授に継ぐ年代だった我々も含め、みんなで運命共同体のようにしてやって来られたこと。血管障害を任せられ、疲れて休みたいと言う暇もなく、文字どおり現場で鍛えられたということです。

この藤田保健衛生大学病院は病床数1300、去年の脳外科手術数も500例。日本では最大規模のひとつだと思いますし、活気に満ちています。

脳血管障害がご専門ですね。

加藤：ええ。少し前までは脳の手術をすれば後遺症は当たり前前という時代でした。しかし今は病変を画像化して、どこから何センチのどの角度という具合にピタッと割り出して摘出するシステムとか、ガンマーメス照射によって少しでも侵襲を減らす。また血管内外科では、カテーテルを通して血管の中から病変にアプローチする、という具合になって来ています。脳外科自体まだ歴史が浅く、顕微鏡が導入されて20年ほどなのですが、そのうちコンピュータ化が進み、ロボットで手術というようになるかも知れません。

女医ということで悩んだ経験はありますか。

加藤：以前は女人禁制のような面や、女だというだけでなかなか信頼されないなどの事実もありました。悩むというほどではありませんが、若いころ、主治医は私なのに周囲の人が下級生の男性医師を主治医と間違えるというようなことはよくあり、困りました。まだ駆け出しで、そんなことに逐一腹を立てていた時もありました(笑)。

今は患者さんの家族との話を通じて信頼関係をつくら



なければならないことが多く、話せばたいい誰でも分かっていたいただけますので、あまりそんなことに神経をつかわなくなりましたね。

最後に、脳神経外科女医会のことについて聞かせて下さい。

加藤：組織ができたのは1990年です。その1年前にできたアメリカの会合への参加を指名されたというのがきっかけだったのです。「あんたが行きなさいよ」と言われたんですが、「イヤー、それじゃおこがましい」などと言っているうちに、専門医が25人集まって、シャンシャンとできあがったという次第です。年に2回の会合を開き、会報も出しています。これから専門医を目指そうという若い女医さんに、「いまはしんどくても頑張ろう」というふうに刺激になれば、と思っています。

先程も触れたように、これからは脳外科の手術自体がどんどんスマートにエレガントにできるようになって行くでしょう。それに細分化されると同時に、免疫学、分子生物学、遺伝学、神経病理などに窓口が広がり、女性が家庭を持ちながらでも十分続けられるのではないかと思います。

※ ※ ※ ※

※吉岡弥生賞は、日本女医会が昭和42年に設置。毎年、会員や団体の中から、「医学に貢献した」または「社会に貢献した」ことによって推薦される。

遺伝子治療の技術と倫理

高久 史磨

たかく・ふみまろ

1931年、東京生まれ。54年、東京大学医学部卒業。自治医科大学教授、東京大学医学部教授などを経て、現在、国立国際医療センター総長。



DNAの異常による先天性の難病は5000以上あると言われているが、ヒトゲノム解析計画などの急速な進展によってその原因遺伝子が次々につきとめられている。いま、遺伝子工学の臨床的応用が進む中で、DNA自体への実験的治療が注目されている。

血液凝固因子欠乏のために怪我などで出血したときに血が止まらなくなる血友病も、DNAの異常によっておこる。血液製剤のHIV汚染によって、日本の血友病患者約5000人のうち2000人あまりがエイズに感染して問題になったばかりである。この4月、世界保健機関WHOの遺伝病対策部は、血友病の遺伝子治療を2000年頃までに実用できるとの予測を発表した。患者の細胞に正常な（血液凝固因子を作る）遺伝子を入れて血が止まるようにする治療が、あと5～6年で実現するだろうというのである。

決め手になる治療がない難病の患者さんにとっては、まさに“福音”と言えそうだが……。

“究極の治療”

遺伝子治療は生命の本体であるDNAに対する治療であるところから“究極の治療”とか、21世紀の治療と言われる。この意味について、高久史磨・国立国際医療センター総長は、「自然科学のあらゆる分野がマクロからミクロへ向かう中で、生命科学も個体から細胞へ、タンパク質から遺伝子へとターゲットが絞られてきました。しかも生命の起源に関しては、DNAは中核的問題です。そうしたことから、まず先天性疾患はDNAの異常でおこることが明らかになり、次いでがんも、基本的にはDNAレベルの異常が結果としてがんという病気につながるということが解ってきました。それと前後して、様々な後天性の病気も、環境と体質、つまり外的要因と内的要因の相互作用によっておこることがはっきりしてきたわけです。感染症でもかかりにくい人とかかかりやすい人がいますね。今まで人間は外的な要因に対しては十分ながら対応してきたが、内的な要因に対してはどうするか

ともできなかったのです。この内的な要因への対応が遺伝子工学の発展によってはじめて可能になった。ということはDNAへのアプローチが、ある程度できるようになった。そこでいろいろな疾患に対して外的・内的、両方での対策が考えられ始めました。例えば糖尿病や高血圧には食事療法等だけでなく、糖尿病や高血圧になりやすいDNAがあれば、それに対して何かできないか、という方向に進むことが考えられるのです。つまり、今まで手のつけられなかったDNAレベルで病気を治していこうという、まったく新しい発想。究極かどうかはわかりませんが画期的、エポックメイキングであることは間違いありません。」と語る。

遺伝子治療

1980年頃から遺伝子工学の発展が臨床的に応用され、インターフェロンや成長ホルモン、赤血球や白血球を増やすサイカインなど、薬のようなかたちで使われ始めた。

1990年アメリカで、アデノシンデアミナーゼ(ADA)欠損症という免疫不全の遺伝病に対する遺伝子治療が行われた。膨大な基礎実験、動物実験のすえ、米国立保健研究所(NIH)の審査を経てのことだ。特定の酵素をつくる遺伝子の異常で、ADAができないためにリンパ球が壊れてしまい重症の免疫不全をおこす。患者数は全世界で約30人。この患者さんのリンパ球をとって、試験管内でADA酵素の遺伝子を入れて増やし、それをふたたび患者さんに戻すという治療である。アメリカに続いてイタリア、フランス、オランダ、イギリスなどでも実施され、現在では、造血幹細胞への治療に進んでいる。

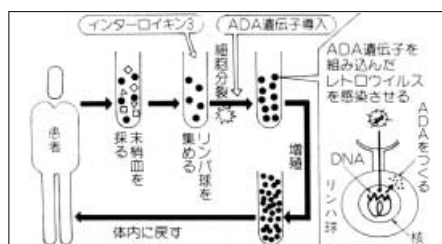
重症免疫不全症では、生まれてから12年間プラスチック製の無菌室で過ごし、84年に感染症で亡くなった少年が有名だ。日本でも年間40人程度の色々な型の免疫不全の子供が生まれるが、そのほとんどは2才位までに死亡してしまう

という。

以後、メラノーマ(悪性黒色腫)、嚢胞性線維症等、アメリカでは72のプロトコルがNIHの審議にかけられた。更にウィルソン病、ハンチントン舞蹈病、筋緊張性ジストロフィー、神経線維腫症等の原因遺伝子も次々と発見され、DNA診断が可能になった。治療法の開発は時間の問題とも言える。遺伝病だけではない。ガンやエイズへの遺伝子レベルでの対応に、最も優秀な研究者達がしのぎを削っている。

日本でも、リンパ球を刺激するインターロイキン6遺伝子を肺がん遺伝子に組み込む、腫瘍壊死因子(TNF)をリンパ球に入れる、P53というガン抑制遺伝子を直接がん組織に戻す、膵臓ガンをおこす遺伝子にふたをして増殖を防ごうという方法などが研究されている。「日本ではガンとエイズ。先天性疾患は世界的にも少数ですが、日本では特に少ない。エイズも少ない。さしあたってはガンが対象になっています。」と高久先生。ただし、これらはまだまだ実験段階のものだ。「日本では最初の臨床応用までにまだ1年位はかかる」という。

アメリカでも、ADA欠損症の遺伝子治療はうまくいく特殊な例のようだ。例えば、粘り気の高い分泌物のために気管支がつまる等の症状をおこす嚢胞性線維症に対して、風邪のアデノウイルスに正常遺伝子断片を組み込んで吸引させようという治療も、昨年NIHの許可を受けたが、「現実にはウイルスに対する抗体ができてしまい、必ずしもうまくいかない」という指摘もあるようだ。



ADA欠損症の遺伝子治療('93.3.31.朝日新聞)

遺伝子治療は将来産業になる?

NIHの組み換えDNA諮問委員会での審議は、「現在72件、恐らく今年中に100を越える」と予想される。日本では大学の倫理委員会などには提出されているが中央の評価会議(厚生省)ではまだゼロである。ヨーロッパでも研究されているものの、「遺伝子治療に関するテクノロジーは100%近く、アメリカがパテントを待っている」。

嚢胞性線維症の遺伝子治療の許可を得たのはジェネテック・セラピー社という企業だが、バイオ企業などの資金協力を得るベンチャー企業も20数社に及ぶという。遺伝子の運搬役(ベクター)の生産はほとんどが民間で行われており、「20世紀のワクチンや抗生物質に匹敵する、21世紀の重要な医学分野」「どんな病気も、将来的には遺伝子治療の対象になる」。ゆくゆくはアメリカの医療政策の一環として位置づけられ、大きな産業に成長する可能性もある。「パテント問題は非常に大きな問題になる。これによってアメリカは世界を支配するようになると言っても過言ではないでしょう」(高

久先生)という。

意味の解らない遺伝子も多数発見されているが、これでもすくなくとも機能の予測は可能になっているようだ。

倫理問題とガイドライン

遺伝性の難病には決め手になる治療がない。そうでない人にはまったく想像もできないような苦しみをなめなければならぬ患者さんにとっては、遺伝子治療は“福音”といえる。ガンやエイズも同様だ。まだまだ実験段階の治療とわかっていても、大きな期待が寄せられているようだ。期待が大きいのと裏腹に、様々な懸念、不安、批判があることも事実だ。危険が大きい、費用がかかり過ぎる等だけでなく、もっと根本的な批判もある。

「大勢の科学者がさまざまな研究から得た小さな断片的な知識や発見の積み重ねから生まれるこうした進歩の果てに(中略)、本来医療を高度にすることによって病むものを救い、人生に希望を与えるものだったはずだ。しかしいったん遺伝子の扉が開かれると底知れない落とし穴が待ち受けている予感を禁じ得ない。人間は自然の摂理に逆らってどこまで神の領域に踏み込むのか」(M.ウォルホルツ他『遺伝子の狩人』)というものなど。“優生政策”は悪夢ではなく歴史的現実だった。

高久先生も委員をつとめる厚生省の『遺伝子治療に関する専門委員会』のガイドラインは

- ①致死性が高い病気で、他の治療方法と比較して遺伝子治療が優れているか
 - ②遺伝子と遺伝子を運ぶウイルス(ベクター)の安全性が確認されているか
 - ③ベクターが他の病気を誘発しないか
 - ④動物実験などで効果が証明されているか
 - ⑤インフォームドコンセント(十分な説明と自発的な同意)が得られているか
- などを指針としている。

「あくまでも病気の治療を目的とし、生殖細胞を操作するとか、正常な人の能力を高めるとか、そういう方向には行くべきではない。」が、例えば「ニューロサイエンスの研究によって脳の働きに関係するDNAが解ったとき、その知識を社会とどのように調和させるか」(高久先生)は大きな問題だ。

科学はもろ刃の剣であり、「こうなる恐れがあるからやらない」という訳にはいかないのが科学者」だから、やった後でそれを修正または、より高い技術で補うしかない。だとしたら、これからは進歩と抑制のバランスをうまくとることが必要のように思われる。

高久先生は「科学者全てに倫理的なものを求めるのは困難。周囲でやるしかないでしょう。」「個人的には、少なくとも委員会の倫理面の審議は公開にされるべきだと考えています。ただそれには、方向性が正確に伝えられなければ意味がありません。部分的に取り上げられるとミスリーディングにつながる恐れがありますから。」と慎重な意見だった。

FAITH

——夏目漱石『それから』をよすがに——

生命の本質を探る

秋月龍氓

あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧
著書に、『秋月龍氓著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。



最近、英会話の本を読んでいたら、面白い話にぶつかった。日本人留学生の話。ある日、部屋でテレビを見ていると、ホームステイ先の女の子がやって来て、突然、真面目な顔で、“I need you !”（私はあなたを必要とする）という。これ、映画などでは愛の告白でお馴染みの言葉である。あまり唐突なことで驚いていると、なぜか部屋まで連れて行かれて模様替えのお手伝いをさせられたとか……。

“I need you !”は愛の告白の言葉？実は日常的なお手伝いをお願いするときの決まり文句でもあるという。「あなたが必要」には違いないが、ちょっと残念でした。（「英語 この順序で覚えれば絶対だ」かんき出版）

夏目漱石に「それから」という中編小説がある。長井代介という、三十になっても職業をもたないで、父親や兄からの仕送りで趣味的な生活をしている明治の教養人、漱石の言葉でいうと「天下の遊民」として生きている人物が主人公である。

彼、代介は、漱石のロンドンきやくしんの客舎における経験、すなわちそれまでの「他人本位」から「自己本位」の立場に目覚めた、その「自己本位」の人物の漱石の創作における最初の収穫と目されている。

漱石はまず代介を目覚めた近代的な個人主義者、明治のインテリとして描いている。その家族も社会も国家も、いや人類の道義さえもが、ただ彼自身の生活の充実と進歩と向上のためにある。逆に人間としての彼自身が家庭のために社会のために国家のために人類の道義のためにあるのではない。彼はどこまでも、目覚めた近

代的な「自我」の立場、市民社会的な個人の自由と独立の立場に立っている人間である。だから、彼が何かをしようとするとき、彼のその衝動に先立って、あらかじめ彼の生活を客観的に規制するような、いかなる価値も、いかなる法の存在も、彼は認めない。彼自身の生活は、彼自身に始まって彼自身に終わる。こういう近代的な「自我」の権化みたいな男として、代介は描かれている。これが芥川龍之介ら当時の青年たちの心をとらえたのである。

そういった代介が、ちょっとした英雄的な気分から、心ひそかに思っていた恋人の三千代を友人の平岡の妻として取り持つ。二人の結婚生活がうまく行かず、子供も死んで、平岡は大阪で事業に失敗して、夫婦して東京へ戻ってくる。生活に困った三千代は、代介に金の工面を頼む。そういう三千代の境遇に同情して助けていくうちに代介は、どうしようもない愛情を感じ始める。

一方、実業家である代介の父は、自分の事業のためにもあって、地方の素封家の佐川の娘を妻にと考えるが、代介はそれを断って、三千代と一緒にすることを決意する。そして三千代を呼んで、「僕の存在には、あなたがどうしても必要だ」（I need you !）と告白する。「そんなことなら、平岡と自分との間を取り持ちたりせずに、なぜもっと早く言ってくれなかったのか。」と、三千代は泣いて恨むが、結局、代介の愛を受け入れる。二人は愛の幸福を味わうが、代介はこのことを平岡に打ち明けて絶交される。その平岡の手紙で、父や兄からも義絶され、一方三千代は重い病気になり、代介は新しい生活のために職業を探しに炎天下のもとに飛び出して行く……。

だいたいこういう粗筋である。

かつての恋人、今は友人の妻である三千代に、離れがたく引きつけられる自分を顧みて、代介は我とわが心を良心で責める。そして平岡をふたたび三千代の許に帰らせようとして努力する。邪(よこしま)な恋を思い切ろうという反省と、友人夫婦を元の仲のいい夫婦に返そうという努力と、そういう一切の試みが、自分が三千代に引かれていく力の前には、むなしい造作、作為(ぞうさ、はからい)にすぎないと気づいて、代介はしばらく躊躇してのち、ついに意志の人たることをやめて、自然の人になろうと決意する。

作品の中には、こう書いてある。「彼はしばらくして、『今日始めて自然の昔に帰るんだ』と胸の中で言った。こう言い得た時、彼は年頃にな^{あんな}い安慰を総身に覚えた。何故もっと早く帰ることが出来なかったのかと思った。始めから何故自然に抵抗したのかと思った」と。これはいったいどういうことか。

「“意志の人”たることをやめて“自然の人”になる」。「意志の人」というのは、比較的によく分かる。人妻への恋という邪まな心を我とみずから良心によって、すなわち意志的な努力であきらめようとする。ところが「自然の人」になるとは何か。これはちょっと分かりにくい。問題はこの「自然」という語にある。

代介にとって、三千代の許に帰るということはどういうことだったのだろうか。それは彼みずからの存在の根底に臨んでいる「天意」に従うか、あるいは「意志の人」として我を張り通すか。天意とは天の心、彼自身の本来の魂の故郷である「自然」。そうだ、人間の自然、本然、本性、文字どおりヒューマン・ネイチャー(human nature)である。それに反して、小さな自分の我意を張り通す、たとえばそれが「道徳」という名の反省、すなわち「意志の人」としての我であっても、そうした自我の強情的努力を張り通すか、それとも人間の本来の自然に帰るかという分かれ目に立っての人生の決断。それは仏教でいう「自我」から「無我」への転回だったのである。

漱石がここで問題にしたのは、恋愛という人間の心情も、結婚という社会の掟(おきて)も、同時にそこから起こるそこなる「場所」、すなわち人間の根源的な「自然」なる本性、「仏性」(自己の「無」の場所)というもののについての言挙(ことあげ)である。自分自身の存在の根底に臨む「天意」に従うか、またはその人間性の「自然」に背いて、あくまで「我意(小さな私)」を張り通すかという、岐路(わかれ道)に立っての人生決断である。漱

石は最晩年の何年か、「則天去私」(そくてんきよし・天に則って私を去る)という東洋的な悟道に達して生きたという。私はそれはすでに、こうして『それから』という作品の中に予測できると思う。

漱石の、「他人本位」から「自己本位」への目覚めということは漱石学者のいうような、「幕末の江戸の旧名主の家に生まれて封建的な他律主義の中に育った彼が、明治も三十年代の欧化主義的近代化の進行の中で近代主義者としての洗礼を受けてきたのが、本場のイギリスの徹底した個人主義に触れて、改めて近代的な自我に目覚め直す思いがして、自己の立場を確認したのが、『自己本位』であって、その目覚めたはずの漱石が、そうした自我を押しつづぶような、この国のおくれ状況—明治の半封建的な天皇絶対主義—の中で、もろくも挫折せざるを得なかった。そこでふたたび東洋的な諦観の世界へと逃避したのが『則天去私』である」という、一般の漱石解釈に、私は反対である。「自己本位の立場から則天去私へ」は、そうした近代化の挫折による東洋的な諦観への逃避などではなく、逆に「近代から現代へ」という私のいわゆる「後近代者(ポストモダニスト)」への先駆的な苦悩の足跡として見たいのである。それは近代化の挫折でなく徹底であったと。

「僕が存在にはどうしてもあなたが要だ」(I need you!)というのは、一人の男性の一人の女性への愛の告白を超えて、人間性の本然、すなわち「自然(天)」への言挙げであった。これこそ「則天去私」そのものではないか。

我と汝は区別はできる(不可同)が、切り離すことはできない(不可分)。だから我々は他人を愛することによってはじめて、真の自分自身であり得る。「初めに自我ありき」ではなく「初めに我と汝の関係ありき」(M. プーバー)である。人間とは“人と人との間柄”である。私はそこに、人間の「生命の本質」を見る。私は西田哲学の学徒だから、西田哲学的ものの見方ということを踏まえている。「生命とは何か」ということを考えるときも、「自我」からものを見ないで、「世界」(実は「場所」それも、「逆対応を中核とする場所」)からものを見る。私はそれを「空とは自他不二」という禅道仏法の「法(ダルマ)」から学んだ。大乘仏教の「空」とは、初期仏教の「無我」である。そして「無我」のとき「法(ダンマ)」が露わになる。それが「則天去私」である。そのときにのみ、人間の「自然—本来の、真の一の生命」が働くのである。

HOPE Bourgogne

ポンティニイの教会

私がポンティニイの修道院へ行ったのは、オーセールからである。ブルゴーニュ地方のロマネスクを見てパリへ帰る途中だった。オーセールから国道77を走って21キロ、小さな町のはずれ近く、通りから右手に入ると突然に大きな教会の玄関が目に入った。ロマネスク後期、1140年にそれまでの古い建物をこわしてあたらしくつくりはじめたものである。やや尖頭アーチになった八つの盲アーチのもと、中央に開口部とその左右に二つずつの半円アーチが薄明の内部を私にかいま見せてくれるのであった。半円形壁面も何もない。玄関

の屋根の向こうに巨大なやや尖頭アーチの窓があるだけで何の装飾もなかった。

この修道院教会はシトー会に属していたのである。真摯、内面性、深い均衡、ひそやかな勇気というこの会派の精神がこのポンティニイにもみちあふれていた。

創立当初から数百人の修道士がいたといわれるが、その大きさからして今日フランスに残っているシトー会協会のなかで最大というもうなずけるところである。クロード・ヴィエネルがあらわした『ポンティニイ』による歴史を少し辿り直してみたい。

この教会の特徴は「神の正義を守ろうと亡命した英国の高位聖職者」が何人もいたことで知られている。最初の人物はトマス・ベケットでカンタベリイの大司教であった。彼は、ヘンリーⅡ世の親友であったが、やがて王権が司教や教皇が行う破門と上訴を抑制し、聖職者処罰を主張したことと対立して教会法を守ろうとつとめた。6年間の国外亡命のうち、2年間をこのポンティニイで送った。しかし英国に戻った後、司教座聖堂で騎士に殺されている。次も同じく英国のカンタベリイ大司教になったエティエンヌ・ラングトンで1208年から13年にかけて国王ジョンの拒否にあり、ここに滞在、さらに1240年にも聖エドムが同じくカンタベリイ



文芸評論家
饗庭孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に、『石と光の思想』（勁草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）、『恩寵の音楽』（音楽の友社）、『西欧と愛』（小沢書店）、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』（新潮社）、『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。

大司教になるも王と争ってポンティニイに来ている。

この後、協会は『宗教改革』でプロテスタントに、18世紀の「大革命」では破壊を受け、その建物の石は村の修繕のために使われたりもした。しかし、今世紀になってポンティニイはポール・デジャルダンによって買われ、一種の精神的な文化センターとなり、彼の呼びかけですぐれたジード、シャルル・デュ・ボス、アンドレ・マルロー、ロジェ・マルタン、デュ・ガール、フランソワ・モーリヤック、アンドレ・モロワ、それにポール・ヴァレリイがあつまり、哲学、文学、社会問題を論じる知的会議の

場所となったことで有名となった。以後、修道院改革や青少年教育のヨーロッパにおける中心の一つとして機能している。その意味で広汎な影響力をもっている。

入口から身廊に入ると何よりも打たれるものはその白い純粋な内部のかがやきであり、それがつくり出す厳しい雰囲気である。わずかに白と緑の幾何学文様のステンド・グラスと、交差部右におかれた16世紀（一説には17世紀）の聖母マリア像である。彼女の長いマントの裾に、これを仰ぎ見て祈りの姿勢をもつ司教、司祭や庶民たちの人物像が心を惹く。ふし目勝ちの聖母マリアの微笑が美しい。この交差部はきわめてゆったりとしていて高さ16.5メートル、長さ58メートルもある。北の袖廊には床と壁面に階段と戸口の跡がのこっているが、それは、今は取りこわされているものの、かつて寝室からまっすぐ修道士たちが教会へ降りてくるためのものであった。

南の袖廊には、聖具室の戸の横に、司祭用の洗淨水槽が見えた。それにしても身廊の両側にある側廊の何と見事な均衡と採光の美しさであろうか。天井は交差穹隆で典型的なロマネスクである。陽のうつりゆきにに応じて影が白い内部に微妙なニュアンスを与えるのであった。それはシトー会修堂院建築において頂点に達した感がある。

白い純粋なこの空間は内部にここで祈りを捧げる修道士の心次第でいかようにも精神の求心的な姿が描き出されるような印象を与える。白は「無」であり、そこにどのようなものも容れうる自在な面であり、またつねに「精神」の出發を告げるイメージでもある。他の教会のように柱頭彫刻や壁画、綴織やきらびやかな聖具に心を動かされることなく、シトー会の原理がそうであるように、ただ「主のみを求め」る精神のカンバスがこの内部空間と言ってよい。

10世紀、11世紀のロマネスクは簡単なものからヨーロッパ周辺文化とのそれまでの影響もあり、イスラム、オリエントの属性が教会の一部分をなしていた。その時代がやがておわり、シトー会は直接的な主との関係にのみ心を向けるようになった。ポンティニの修道院はまさにこの会の「精神」の到達点を見せている。そうした感慨にとらわれながら私はこの建物をあとにした。ここはもうブルゴーニュ地方の北、パリも程遠くない。私は豊かな土地の風景を眺めながらパリへと帰って行った。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせは(株)佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ

TEL:03-5762-3010 担当:岩沢、田中



P.G.I. 15周年によせて

P.G.I. (フォト・ギャラリー・インターナショナル)は、日本でも数少ない写真専門のギャラリーとして1979年にオープンしました。この15年間に144回の写真展を開催し、121名にのぼる写真家の作品を紹介してまいりました。風景、ポートレート、ドキュメンタリー、スナップショット、スティールライフなど多岐にわたる内容の写真を取り扱っていますが、主に20世紀初頭から現在までの国内外の写真作品を専門としています。

写真は近代の技術が生んだ最初の芸術と言われていきます。写真術の誕生から150余年と、歴史はそれほど古くありませんが、その美しさは他の芸術作品に勝るとも劣らない感動を私たちに与えてくれます。一枚の印画紙の上に現わされた映像は、写真家の哲学であり、生命への問いかけでもあり、また芸術の限らない可能性を秘めているのです。私たちの展示企画は直接写真家と対話することから始まります。それは人と人とのつながりが何よりも大切なことと考えているからです。今後も写真を写真家のメッセージとしてとらえ、写真展を通してこのような魅力あふれる写真に対する理解や共感の輪を広げていくことに努めていきたいと考えています。

(15周年記念—上写真—を抽選で30名にプレゼント。添付の葉書でどうぞ。)

〔P.G.I.からのお知らせ〕

三好耕三 作品展「Southwest: 南西」

1994年6月2日(木)～7月15日(金)

三好耕三 は日本のコンテンポラリーの写真語るうえで欠かせない写真家の一人です。1970年からこれまでに、「Exposure」、「傍観」、「温室」など、一つのテーマや対象にしたがってシリーズとしての作品を創り出してきました。その作品は、東京国立近代美術館や東京都写真美術館などにコレクションされています。1991年から文化庁芸術家在外研修員として、アリゾナ州に滞在し、アメリカの南西部をとらえた作品を創り続けています。今回の展示では、アリゾナ州を拠点として撮影されたモノクロームの作品約40点を展示し、三好耕三によって生み出された映像の魅力を明らかにします。



©Kozo Miyoshi



フォト・ギャラリー・インターナショナル

〒105 東京都港区虎の門2-5-18 TEL.03-3501-9123